



現場の力

E2 池田知隆(ジャーナリスト)

「あいつ、食堂のおばさんに惚れつとたんじゃなかか」

総選挙が公示された10月10日の夜、飛騨・下呂温泉で開いたミニ同窓会。電気工学科2期生が10人集まり、昔話の花を咲かせた。卒業以来初めて見る顔もあったが、気分は一気に青春のころにタイムスリップした。

入学したのは1964年。東京5輪が開かれ、新幹線が走った年だ。出身地は北九州から鹿児島まで。中学浪人組、高校からの再受験組、炭鉱事故で父を失った友……と同期生は実に多彩だった。

それから半世紀。高度経済成長の波に乗り、パナソニック、東芝、NEC、IBM、川崎重工……などの大手企業で級友たちは勤めあげた。「長時間の残業は苦にしなかった」「海外派遣、リストラにあったけど、健康第一や」。それぞれの人生経路を披露したところで、最近の企業不正の問題に嘆きの声が相次いだ。

東芝、三菱自動車、日産、スバル、神戸製鋼と長期にわたる大規模な不正行為。日本の製造業は「本社やトップがダメでも、現場の強さが支える」といわれたものだが、いまや通用しない。

企業間の競争が厳しいなかで、経営陣は抜本的な手を打たず、実現不可能な目標を掲げる。省力化、合理化は途切れもなく進み、技術者は自立心を失いがちだ。納期に追われ、不正を見過ごすために現場で創意工夫がなされているのだろうか。まるで日本社会の底がぬけかかっているようだが、日本型経営の問題にとどまらず、この病いの根は深い。

「おい、いまの高専生に言いたいことがある?」。酔いを醒ます野暮な質問を投げかけると、「やっぱし、世界の動きをよく知ることやな」と返ってきた。F君はしみじみといった。「高専でいろんな本を読む習慣をつけてもらった。あれは本当によかったよ」

私もふと、工業教育について語った恩師の言葉を思い出した。

「Don't teach your students engineering・teach them to be engineers!」(技術を教えるのでなく、技術者であることを教えるべきだ)